

オオクニヌシの活動領域と表された図には、伯耆・因幡・高志とともに諏訪が書かれています。古事記の出雲神話には、因幡のヤガミヒメや、高志のヌナカワヒメが登場しますが、それらが玉の石材産出地などであることから、出雲とそれらの地域が弥生時代から交流があり、それが神話に反映されたと考えるのは、講師ならずとも大きく頷けるところです。しかし信州生まれの友人は、この図に諏訪(州羽)も加わっているのが新鮮な驚きでした。何故なら国譲りと言う神話のクライマックスにどうして州羽の地名が登場するのかずっと理解できず、山陰のどこかに、ローカルな州羽があったのではないかと疑っていたからです。開始直後の自己紹介で時間が押され、出雲と州羽の説明が割愛されたのが残念でした。今後、信州から四隅突出型墳丘墓が発見されるかわかりませんが、出雲との交流を示す遺物が出土したら面白いと思います。

古事記が書かれた4年後に出雲臣果安による神賀詞奏上が行われ、歴代の出雲国造が継承していきますが、奏上の際に、“赤水精、白水精、青石玉”の三種の玉を献上しています。この玉の献上は、出雲国造が全国の国造を代表していることを示しているのかも知れません。なぜなら古代に各地で営まれていた玉造りが、6世紀に入ると出雲では最盛期を迎える一方で、他の地方では行われなくなり、玉造りにおいて出雲の比重が最高潮に高まっていたからです。

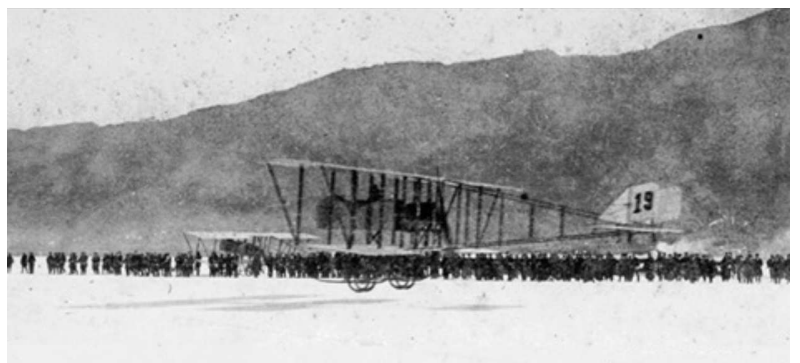
山陰の弥生人が東方に交流先を展開した理由を尋ねられた根鈴先生は、北陸のヒスイが重要であるとお答えになりました。ヒスイは完成品の美しさからみても、希少性の点からみても、高度な作成技術を必要とすることからみても優れた石材だと言えるでしょう。しかし、ボリュームゾーンを掌握することが最終的にはハイエンドにも精通していくことになるので、ヒスイより物流の多い碧玉製品を作り込み、技を極めていったことが、玉造りにおける出雲の地位を高めたと思います。

碧玉の玉造りにおいて、出雲には二つの幸運があったと思います。一つは大量の碧玉を産出する北陸と大消費地である北部九州の間にあり、玉造り技術を磨き上げて玉製品の供給に大きく貢献できたことです。二つ目は北陸からの供給が停止するころに、花仙山から上質な碧玉が産出したことです。北陸以東で玉製品の需要は小さく、北陸の玉造り集落が減少していくなかで、出雲は前にも増してその技術を高めていったのではないのでしょうか。

ところで、日本海沿岸地域に広く分布する四隅突出型墳丘墓ですが、但馬・丹後・若狭には造墓されていないようです。沿岸一帯に、一色に染まる連帯があったわけでもないかもしれません。科野が畿内からの干渉を受けるずっと昔から、糸魚川や信濃川を通じて日本海側からの流入があったと考えている友人は、大陸や半島からの直接流入の可能性を考えてきました。当時の航海技術で日本海を越えるのはよほどの幸運に恵まれる必要がありますが、沿岸部を寄港しながらなら十分に可能です。四隅の分布が示すように、友好的とはいえない集団に対しても通過の黙認が得られるならば、北部九州や山陰の影響も受けずに、大陸や半島から独自の集団が州羽に流入していたかもしれません。

諏訪は、7年目毎に開催される御柱祭りが有名です。開催の年には必ずニュースになるのでご存知の方も多いでしょう。その一方近年の温暖化でニュースになることが激減してしまいましたが、諏訪にはもっと神懸りのなものがあります。諏訪は中央高地の山々に囲まれた盆地で、そこにある湖は宍道湖に比べても大きくありませんが、水深が浅く、冬季に全面結氷することがあります。その後氷点下10度を下回る日が3日ほど続くと、湖面の氷がせりあがり、そして轟音とともに氷が割れ、湖面に氷の山脈がそそり立ちます。湖のこちら側から反対側へ連なってあたかも道ができたみたいに見えます。この道は諏訪大社の上社にいる男神「建御名方神」が対岸にある下社の女神「八坂刀売神」に会いに行った跡であり、神様の通った跡であるということで「御神渡り」と言われています。

諏訪大社には、1443年以降の御神渡りの出現日の記録があるそうですが、その記録より遥か昔、縄文や弥生の倭人たちもその光景を見たことでしょう。なかには出雲を経て諏訪に至った大陸・半島からの渡来人もいたかもしれません。彼らは列島の人々より進んだ死生観を持っていたかもしれませんが、諏訪湖の御神渡りを目の当たりにしたとき、人を超えるものの衝撃を感じたのではないのでしょうか。



右は大正6年に撮影された複葉機が諏訪湖の氷上に着陸する写真で、その頃の氷の厚さに驚かされます。これほど厚い氷ならば、人の背丈ほどにまでそそり立つことがあったようです。建御名方の逢瀬を阻む温暖化が悔やまれます。